

## 説教以外のコミュニケーション ——ルカの福音書第 10 章 1-11 節から——

福田充男

### はじめに

本稿の目的は、ルカの福音書第 10 章の七十弟子派遣の記事に登場する二人組の弟子たちと宣教地の人々との間のコミュニケーションを分析することにより、日本の地方教会でなされている説教、つまり「学校型モノローグ」とは対極をなす「宣教現場における双方向的コミュニケーション」を、日本の教会に導入するための道を模索することである。

### I. 七十弟子派遣エピソードの背景

福音書には、イエスご自身が取り組まれた弟子たちの組織的な派遣の記事が二種類記録されている。一つは、イエスによる「十二弟子の派遣」で、もう一つは、イエスと十二弟子による「七十弟子（あるいは七十二弟子）の派遣」である。

ルカの福音書第 10 章に記されている七十弟子の派遣の記事は、十二弟子もまたイエスと一緒に派遣する側に立ったという意味で、派遣の連鎖のプロセスを何う重要な資料である。十二弟子は、七十弟子と同行しないことで派遣する側の立場を経験した。つまり、ここで示唆されているのは、十二弟子と同じように、七十弟子もまたやがて派遣する側に立ち、自分たちが育てた弟子たちを派遣するという循環が起こったという点だ。そして、その後も、派遣する度に

約 6 倍 (70÷12≒6) の人数を送り出すということが一つの型になったと考えられることだ<sup>1</sup>。弟子派遣の二種類の記事は、大宣教命令の実行が、弟子育成者の連続的な派遣に伴う、弟子の幾何級数的な増加によってもたらされたことを主張しているように思われる。

ルカの福音書第 10 章の派遣が非常に成功したということは、直後に記されている弟子たちの喜びの報告によって明らかである (ルカ 10:17 参照)。ミッションの成功は、緻密な計画が実行された結果というわけではない。戦略は、漁師たちが実行できるシンプルな指示によって構成されていた。「無学なただの人たち」(使徒 4:13) と見られた人たちは、分厚いマニュアルを読むことはできなかつただろう。記されている項目は、「覚え書き」とか、「きっかけ」とかと表現した方がよいほど簡素なものだった。実際、真に有効な戦略はシンプルなのだ。

戦略がシンプルだった理由は、少なくとも三つあると思われる。第 1 に、賜物が豊かで優れた能力を持つ一握りの人たちだけでなく、誰でも実行できるようになるためだった。このシンプルさが増殖の鍵だ。第 2 に、詳細なマニュアルがなくても為すべきことがすでに身に付いていたからだ。派遣された者たちは、派遣前に、イエスご自身や兄弟子たちと生活を共にしてきたので、模範を見たり、練習をしたり、委任されたりした経験が豊かにあった。第 3 に、彼らは聖霊の導きを受けていたので、その場その場で父に聞きながら、時に応じて行動することができたからだ (マタイ 10:20 参照)。

弟子たちが派遣された町は皆ユダヤの町だったし、弟子たちは全員ユダヤ人だったので、イエスが行くようにと命じられた目的の町に着いた日とその翌日は、宿泊を手配する必要はなかった。なぜなら、自分たちの町に来た旅人がユダヤ人だということを町のリーダーたちが判別した時点で、彼らは町のゲストとして有力者の家に斡旋されたからだ。旅人たちは、2 日の間、無料で宿泊したり飲み食いしたりすることができた。イエスは、すでにあったユダヤ人の相互扶助システムを用いて宣教を進められたのだ。

<sup>1</sup> David S. Lim, "Towards a Radical Contextualization Paradigm in Evangelizing Buddhists," in *Sharing Jesus in the Buddhist World..* (eds. David Lim and Steve Spaulding, Pasadena, CA: William Carey Library, 2003), 75-76 参照

その伝統は、次の時代の使徒たちにも受け継がれた。パウロは新しい町に行くと、ユダヤ人の会堂で話した。マタイはエチオピアまで、アンデレはロシアまで、トマスはインドまで行ったと言われているが、彼らは、点在するユダヤ人のコミュニティを辿っていったのだと思われる。会堂は魂の刈り取り場であり、平安の子たちとの出会いの場所だった<sup>2</sup>。そういうわけで、ルカの福音書第 10 章で派遣された 2 人組の弟子たちは、どこに行っても、財布も袋も持たずに旅行できたのである。

しかし、滞在三日目以降にも続けてその家に宿泊するためには、何らかの料金を支払うか、家業を手伝う必要があった。二人の弟子たちはお金を持っていくことを禁じられていたので、宿賃を支払うというオプションはなかった。彼らは、三日目以降、平安の子の家業を手伝ったと思われる。海辺や湖の町なら、漁と一緒に出ただろうし、農村なら農耕を、放牧地なら放牧をというように、何であれ、世話になった家族の仕事を手伝うことで、引き続きその家に留まったのである。

弟子たちのコミュニケーションは、食卓と仕事場、つまり日常生活の中でなされた。イエスが所有物の携帯を禁止されたのは、彼らが仕事場で福音を伝えるためだったと考えられる。もし、イエスが福音宣教のために学校システムが有効だと思われたなら、今でも「イエス大学」みたいなものが残っていただろう。イエスのコミュニケーションは、徹頭徹尾、教室での講義ではなく、生活に直に関与することによってなされた。

## II. 弟子たちのコミュニケーション

それでは以下に、ルカの福音書第 10 章の七十弟子派遣の記事から、派遣さ

<sup>2</sup> ユダヤ人の会堂や神殿で弟子たちがキリスト教会の礼拝をしたと考え、それをセレブレーションと呼び、各家での礼拝をセルと呼んで、二つの礼拝の形があったと主張する向きがあるが、それは弟子たちの伝道の力を過小評価した上での時代錯誤である。弟子たちは、ユダヤの町や村に二人組で派遣されたように、エルサレムではメシアを待ち望むユダヤ人がいた神殿に、異邦人の地域ではディアスポラや神を畏れる異邦人が集まっていたユダヤ人の会堂に、二人組で戦略的に派遣されてメシアの到来を証したのだ。



れた弟子たちが、派遣先で出会った平安の子とその家族に対して、どのようなコミュニケーションをしたかを概観する。

### 1) 収穫のために働き手を育てる実地訓練

パウロはテモテに対して、「他の人にも教える力のある忠実な人たち」(Ⅱテモテ 2:2) を教えるようにと命じた。弟子育成のバトンが次々に手渡されていく様子を、家系になぞらえると、パウロが第一世代なら、テモテが第二世代、「忠実な人たち」が第三世代、そして、「他の人」が第四世代ということになる。第一世代のパウロは、第二世代のテモテに、単に弟子を育てよと命じたのではなく、弟子育成者を育てるようにと命じた。弟子育成のバトンが四世代先まで手渡されるようにすることが、幾何級数的に弟子が増殖するムーブメントの土台を据えるための必要条件なのである。

この増殖の DNA の創始者は、神ご自身だ。すべての地上の生物は、人間を含めて「生めよ。ふえよ。地を満たせ。」(創世記 1:28) という命令を受けている。これはもとより、最初の間が何十億人もの子どもを産むようになる、という命令ではない。子が孫を、孫がひ孫をとるように、世代が下って行くことが想定されている。神がアブラハムを外に連れ出して「さあ、天を見上げなさい。星を数えることができるなら、それを数えなさい。」と語りかけ、さらに、「あなたの子孫はこのようになる。」(創世記 15:5) と約束されたとき、アブラハムから数えて四世代目となるヤコブの子孫であるイスラエル民族、さらには、アブラハムの信仰を継承するイエスの弟子たちの群れを見通しておられたのだ。

そういう意味で、七十弟子は十二弟子によって育てられたと考えるのが自然だ。イエスが十二弟子を育て、十二弟子が七十弟子を育てたとするなら、イエスから数えて三代目目の弟子が七十弟子だったということになる。三代目目の七十弟子は、二世目目の十二弟子から弟子育成者として育てられた者たちであり、収穫の畑に出かけて行って第四世代の弟子を育てるというミッションを与えられていた。だから、七十弟子に委ねられた主要な働きは、収穫を刈り取るのではなく、収穫の畑の中で「収穫を刈り取る働き人」を育てることだったのである。

イエスは、「実りは多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主に、収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさい。」(ルカ 10:2) と命じられた。この命令は、「働き人をリクルートしてから出掛けなさい。」という意味ではなく、「出かけたところで働き人と出会うように祈れ。」という意味だった。収穫の畑に出かける人たちは、すでに任命され、二人一組に分けられていた。一つの町の救いのために、三人目の働き人が起こされるのを待つ必要はなかったのだ。何よりも大切なことは、二人組の弟子が派遣された町で出会う平安の子たちが、弟子育成者を育てる育成者となること、つまり、霊的な孫を見ることができるよう育てることだったのである。このような弟子育成の連鎖が、結果的に広範囲に及ぶ収穫の刈り取りとなった。

一つの派遣事業で何人の回心者が起こされるのか、ということは、あまり大きな問題ではない。収穫は多いと言われているので、それは多数に決まっている。問題は、将来「霊的なひ孫」を与えられる人が派遣されるかどうか、という点である。七十弟子は、「狼の群れの中に子羊を送り出すようなもの」(3節)と言われても、「財布も旅行袋も持たず、くつもはかずに行きなさい。」(4節)と言われても、安全で便利な場所を離れて、宣教地に出かけていくほど宣教のために動機付けられた人たちだった。彼らが見ていたものは、自分たちの働きを通して、イエスの家系に加えられていく霊的な子孫たちの群れだったのだと思う。

霊的なひ孫が育てられるために必要なことは少なくとも三つある。1) 弟子の一人ひとりが神に直接つながる。もちろん、リーダーが模範を示す必要があるが、霊的な親に依存させてはならない。エリが少年サムエルに、「『主よ。お話しください。しもべは聞いております。』と申し上げなさい。」(Ⅰサムエル 3:9) と勧めたように、リーダーは弟子たちを神との直接的な対話へと導く必要がある。2) 「みことばを聞いてそれを悟る」(マタイ 13:23)。つまり「すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられ」(Ⅰテモテ 2:4) する神の心を受け取ることだ。家族や町や国や諸国が救われるために、世から召し出されたことを理解して実行することだ。3) 一緒に派遣された2人が一致して働けるように愛しあう。「もしあなたがたの互いの中に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるので



す。」(ヨハネ 13:35)

弟子たちのコミュニケーションの特徴は、イエスの生き方を模倣することだった。つまり、まず、自ら模範を示し、次に、手許で弟子たちが自分たちでできるように助け、その上で、霊的な孫を見ることが出来る者として派遣する。神との直接的な対話も、世界宣教のための働きも、互いに愛しあうことも、単に教えるだけでは身に付かない。模範、育成、派遣と続く実地訓練のプロセスの中で内在化され、世代を越えて増え広がったのである。

## 2) 平安を祈る

町のリーダーたちが斡旋してくれた家に入るときに、彼らがまずしたことは、平安を祈ることだった。弟子たちは、「どんな家にはいっても、まず、『この家に平安があるように。』と言いなさい。もしそこに平安の子がいたら、あなたがたの祈った平安は、その人の上にとどまります。だが、もしいないなら、その平安はあなたがたに返って来ます。」(ルカ 10:6) と命じられた。

ルカの福音書第 10 章の派遣は、自分のオikos (家族や職場や地元の人脈) の外の領域への派遣なので、宣教者たちは、馴染みのない習慣を持つ宣教地の人たちと接することで文化ギャップを経験したに違いない。文化的背景を異にする人々に出会ったときに、自分の文化では当たり前だったことが、外国に行くとは適切ではないということを改めて認識する。そのときに、自分の経験を絶対化して異文化を裁いてしまつては、相手を理解することはできない。現代のように旅行が一般的ではなかった時代では特に、見知らぬ町に滞在するためには、最初にこのカルチャーショックを乗り越えなければならなかった。

そこで、イエスは弟子たちに、まず挨拶をするように命じられたのだ。福音を待っている人たちは、福音を伝える人たちよりも劣っているわけではない。無自覚のままだと持ってしまうがちな違和感や警戒感や敵対意識を捨てて、相手のありのままを受け入れて祝福するところからコミュニケーションを始めるべきだ。「平安があるように。」という祈りは、条件なしに神があなたを愛しているというメッセージを相手に伝える。平安とは、人が神から受け得る祝福の

総体を表わしている<sup>3</sup>。2人の弟子たちは、自分たちを受け入れてくれた家長とその家に、神から来るあらゆる祝福が注がれるように、という思いで訪問した。

また、ここでは、祝福する気持ちが相手に伝わるという以上のことが起こった。つまり、「平安があるように」と宣言し、その人が平安を受け取るべき人であるなら、実際に平安がその人の上にとどまったのだ。「神が『光よ。あれ。』と仰せられた。すると光ができた。」(創世記 1:3) という創造のときの権威の発動が宣教地で起こった。イザヤ書で、「雨や雪が天から降ってもとに戻らず、必ず地を潤し、それに物を生えさせ、芽を出させ、種蒔く者には種を与え、食べる者にはパンを与える。そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。」(イザヤ 55:10~11) と説明されている「言葉の現実化」である。

弟子たちは、神の国の王であるイエスから権威を委任されたものとして、宣教地の人々に対して、いわば神を代表し、神の働きを代行したのだ。弟子たちは、イエスが命じられた通りに行動することで、「暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移」(コロサイ 1:13) されていく人々を見ることができた。その働きはまた、宣教者がただ恵みによってのみ受けることができる、栄光ある「義とする務め」(Ⅱコリント 3:9) だった。平安を祈ることは、「いのちから出ていのちに至らせるかおり」(Ⅱコリント 2:16) として機能することだった。

家長が平安の子かどうかは、弟子たちが祈った平安を受け取るかどうかで見分けることができた。コミュニケーションが展開するかどうかは、この最初の遭遇で決まった。その時点で、狭義の伝道、つまり、「平安を受け取って神の国の王に従って生きるように導く働き」は、一旦(あるいは、場合によっては永遠に)終了したということだ。家長が平安を受け取った場合は、「家から家へと渡り歩」(ルカ 10:7) かず、平安の子の家にとどまり、弟子たちのライフスタイルを見せることを通して、神の国を受け入れた人々を育成するために時間が

<sup>3</sup> Walter Brueggemann, *Living Toward A Vision: Biblical Reflections On Shalom*. (Philadelphia, PA: United Church Press, 1976), 39 参照